

「非凡なる凡人」論

— 独歩へ精神革命のゆくえ —

岩崎文人

一

独歩の第三創作集『運命』（明39・3）に収録された「日の出」（明36・1）「非凡なる凡人」（明36・3）「馬上の友」（明36・5）などは、同じ作品集に収録されている「酒中日記」（明36・11）「運命論者」（明35・12）「悪魔」（明36・5）などの「暗い宿命的な作品群」に対して「上昇期の市民社会に特有な明るい肯定的な作品群」として、確かに特異なものである。

こうした特異性は、『運命』という限定された枠内にとどまらず、独歩文学全体の中においても、あるいは、もっと広く当時の文学状況の中でも異質のものといつてよい。

たとえば、処女作「源叔父」（明30・8）から晩年の「竹の木戸」「二老人」（明41・1）にいたる独歩文学の軌跡は、おおむね、多くの死もしくは挫折のあるいは救済されることのない様々な△小民▽の描出のそれとしてとらえられるが、「非凡なる凡人」系列の作品は、贅りのない上昇型の人物が描かれており、きわだつた明るさを有している。

また、これらの作品が発表された明治三十年代半ばといえは、悲惨小説観念小説の流行の後、やがて自然主義文学の潮流が色濃くなっていく時期でもあった。そうであるならば、「非凡なる凡人」系列の作品の特質を闡明するには、こうした複合的な視点による綿密な読みが、当然要求される。が、ここでは、ひとまずその前段階として、「非凡なる凡人」系列の作品が、独歩文学全体の中でどのような位置をしめるのか、また、こうした作品群出現の意味は何か、について検討を加えてみたい。

二

「非凡なる凡人」の構構がいつごろなされたかについては、次のような証言がある。

作では、主人公は桂正作となっておりますが、実際は桂紉といひます。私とは遠い親戚になるのですが、家が近くて、小学校にも一緒に上つたので、私には幼友達でありました。その桂のことを、何かの折に話しましたら、独歩は非常に面白がつて、もつと精しくしてくれろといふのです。改めて知つてゐるだけの話でしたら、それをそのままに纏めたのがこの作品となつたので、これなどは事実そのまま、小説といつてよいかどうか疑問な位です。

（中略）独歩に桂の話をした時には、桂はもう工手学校を出て、横浜の船渠会社に努めてゐました。とにかく立志伝中の珍らしい人なので独歩はすっかり感心してしまひ、会ひたいからどうか連れて言つてくれ、などといつたのでしたが、その機会はなくしてしまひました。

この文章は、独歩の弟取二の友人で、独歩に兄事した画家岡落葉の回想である。⁽²⁾これを裏付けるものとして、次のような落葉宛の独歩の書簡（明35・10・6）が残されている。

拝啓先日は失礼致候

桂君の事を書く積りには間一度面会致し度く就ては横浜の同氏住所番地等急々御一報下度候折返し御返事願上候出来る事なら明日でも御来遊あらば同道致しても宜しく候 草々

実在のモデル桂紉に関しては、すでに谷林博士等のくわしい報告がある⁽³⁾ので、それにゆずるとして、ここでは、これらの資料から「非凡なる凡人」の意図され

たのが明治三十五年十月であること、さらに、モデルの存在が確認できることをまずおさえておきたい。

さて、「非凡なる凡人」は「五六人の年若い者が集まつて互に友の上を噂し合ったことが有る」が、その時、一人の男が年少時からの友人桂正作について語るといふ、独歩文学にはすでに馴染みの深い形式がとられている。ここでの語り手については、独歩文学の変貌を示唆する重要な契機が存しているが、この点については後に触れることとして、話題の主である正作についてみていくこととする。桂正作は、まず、「今年二十四で今は横浜の或会社にて技手として雇はれ専ら電気事業に従事して居る」われわれとさして異なるところのない普通の人、凡人として登場する。しかし、語り手である「僕」は、「此男ほど類の異つた人物はあるまい」と最初の正作観を逆転させて、次のように説明する。

僕は知れば知るほど此男に感心せざるを得ないのである。感心すると言つた処で、秀吉とか、ナポレオンとか其他の天才に感心するのは異うので、此種の人物は千百歳に一人も出るか出ないかであるが、桂正作の如きは平凡なる社会が常に産出し得る人物である。又た平凡なる社会が常に要求する人物である。であるから桂のやうな人物が一人殖へればそれだけ社会が幸福なのである。僕の桂に感心するのは此意味に於てである。又僕が桂をば非凡なる凡人と評するのも此故である。

つまり「非凡なる凡人」は「千百歳に一人も出るか出ないか」の秀吉とかナポレオンといった歴史の頂点に立った天才とは異なり「平凡なる社会が常に要求する人物」であり、このような「人物が一人殖へればそれだけ社会が幸福」になるといった人間として説明されている。しかし、このように定義づけられても、桂正作「ヨール」非凡なる凡人」という図式は、必ずしも鮮明ではない。それは、ひとつには、「非凡なる凡人」と規定する主要な理由が、そう規定する「僕」の側、言い換えるならば、「僕」という語り手の背後に位置する作家独歩の精神にもっぱら依存されているということがある。この作品を読み了えた時点でも事情はさほど変わらない。この点、この作品は「牛肉と馬鈴薯」(明34・11)ほど作品の思想が直截読者に迫ってこないうらみがある。

そうだとすると、落葉の証言、落葉宛の独歩の書簡などにみられる森札への深い関心、さらには「非凡なる凡人」の完成といった事実は、独歩のどのような精神を反映しているのか、といった問をつきつめていくことによってこそ、この作品の特質はみえてくるであろう。

しかし、ここでは、ひとまず作品の内部にたち入ることから始めることとする。正作が「非凡なる凡人」である証しは、まず第一に、父との生き様の対比を遠して現れてくる。正作の父は「昔の武士で、維新の戦争にも出て一かどの功をも立てた」人物であるが、「持前の山氣」のために「蛤の繁殖事業」を手始めに様々な職業に手を出す。しかし、そのことごとくが失敗し、結果「殖産」といふ流行語にかぶれて遂に破産してしまふ。これに対して、正作も父親ゆずりの性格ではあるが、父とは異なり「一転すれば冒険心となり、再転すれば山氣」となる「勇猛心」「敢為の氣象」を「西国立志篇」のおかげで「訓練を加へ、堅実なる有為の精神」とし、やがて志を遂げる。

このように、両者の生き様はきわめて対蹠的である。こうした対比は、実は、この作品に限らず、同時期の作「馬上の友」にも記されている。そこで主人公糸井国之助の父は、維新前は「藩の馬術の指南役で知行百十石を領し、随分立派に暮して」いたのであるが、「維新後の零落甚だしく」ついに貸馬業を営むといった人物である。一方、国之助は、「胸底には燃ゆるばかりの志」を持った少年で、後、運送船の事務長となり志を完うする。このように「非凡なる凡人」系列の作品の主要なモチーフに父と子の生き方の対比があることは注目すべきである。もちろん、言うまでもないことだが、中心になっているのは、それぞれ息子たちの世代である。主人公たちは、いづれも、幕末から明治へと急変していく社会情勢の下で、近代化への流れにのりきれずに不本意な人生を送った、あるいは「殖産」という名で代表される国家政策の中で挫折していった父たちの世代を超えて自らの人生をきり開いていった人物である。なお、ついでに言えば、新時代の潮流から取り残され、埋もれていく父たちの世代に照明があてられているのが「富岡先生」(明35・7)である。

ただ、「馬上の友」がさほど複雑な人物構成をとっていないのに対して、「非凡なる凡人」は、正作の人間像を浮き彫りにするために、さらに兄と二人の弟とを配置している。正作の兄は、「父の山氣を露骨に受けついで」「十六の歳に家を飛び出し音信不通、行方知れずになつて了」い、「布疋に行つたとも」「南米に行つたとも噂」されている。弟の五郎は「正作が横浜の会社に出たと聞くや、国元を飛び出して、東京に」出、「至る処で失敗し、至る処を飛出してうう。」末弟荒雄もまた国を飛び出している。

正作の兄や弟たちのこうしたありようは、独歩文学の中では「河霧」(明31・8)の主人公上田豊吉とほとんど変わらない。豊吉は「大なる事業」を夢み上京

するが「二十年の間に東京を中心として重に東北地方を舞台に色々な事をやつて見たが、遂に失敗」し「精根の泉を涸らして」帰郷する。

このように整理してみると、桂正作と上田豊吉とは対比的に描かれていることがわかる。このことがもともとよくあらわれているのは次のような部分である。

豊吉が、郷党のみなに「前途の成功を卜して其門出を祝」されるが「杉の杜のひげ」とあだ名せられている老人の予言「豊吉が何を成就するものぞ、五年十年のうちには必定若くなつて帰つて来る」の通り「何事も成就し得ないで零落て」故郷に帰つて来たのに対して、正作は、

明治二十七年の春、桂は計画通りに上京し、東京から二三度手紙を寄したけれど、何時も無事を知らずばかりで別に着京後の様子を告げない。又た故郷の者誰も如何して正作が暮らして居るか知らない、父母すら知らない、誰々何人も疑がはなないことが一つあつた。曰く桂正作は何等かの計画を立て、其目的に向つて着々歩を進めて居るだらうという事実である。

豊吉も正作も、ともに立身榮達を目ざし、家郷を後にするのであるが、豊吉の行末は「何を成就するものぞ」という「杉の杜のひげ」の予言に象徴されており、冒頭から既に作者の手によって敗残者として規定されているのに対し、正作の将来は「何等かの計画を立て、其目的に向かつて着々歩を進めて居る」という明るい見通しが立てられ、事実、その通り実現する。

さらにまた、正作の帰省を描出した次のような部分がある。

彼は二年間の貯蓄の三分の二を平気で擲つて、錦絵を買ひ、反物を買ひ、母や弟や、親戚の女子供を喜ばすべく、欣々然として新橋を立出つた。

独歩は、様々な帰郷者⁵を描いているが、そのほとんどが挫折者、敗残者である。しかし、正作は、厳密な意味での成功者であるかどうかは別として、いささか様相を異にしている。たとえば、「忘れえぬ人々」(明31・4)の大阪にしろ、「河霧」の主人公にしろ、あるいは「帰去来」(明34・5)の吉岡峯雄にしろ、ここでの正作のようなさわかき、健康さをいささかも持ち合わせていない。

「非凡なる凡人」系列の作品の持つ明るさ、健康さを発表誌に左右されたものであるとする見方があるが、それはあくまでも二義的な要因である。そうした、いわば外側の問題とは別に、この作品にはより本質的な問題がありそうである。その手がかりは、豊吉型の人間と正作型の人間によって示される立身出世の内実の差である。

三

ところで、ここでいささか奇妙な事実⁶に気づかないわけにはいかない。それは、「西国立志篇」を少年時購入し「ほとんど暗誦するほど熟読」し「将来の大望」を語り合った正作、「燃ゆるばかりの志」を心に潜め上京した国⁷之助、両者の到達点、つまり、英雄でもなく発明家でもない平凡な普通の人と「西国立志篇」で示されたワットやステイブソン、あるいはエジソンといった理想像との落差である。中村正直訳による「西国立志篇」(明4・7)といえは、福沢論吉の「学問のすゝめ」(明5・2)とともに明治立身出世主義の方向づけを行ったベストセラーであるが、正作を平凡な普通の人であるにもかかわらず「活た西国立志篇」とまで記した理由はいったいどのあたりにあるのであろうか。このことは、おそらく、正作が「非凡」⁸と記される問題とそのまま重なるであろう。

彼ほど虚栄心の少ない男は珍らしい。其の境遇に処し、其の信ずる処を行なうて、それで満足し安心し、そして勉勵して居る。彼は決して自分と他人とを比較しない。自分は自分だけのことを為して、運命に安んじて、そして運命を開拓しつゝ進んで行く。

この作品の語り手である「僕」が、桂が仕事をしている現場を見「桂の顔、様子、彼は無人の地に居て、我を忘れ世界を忘れ、身も魂も、今其の為しつゝある仕事に打込んで居る。僕は桂の容貌、斯くまでに真面目なるを見たことがない。見て居る中に、僕は一種の莊嚴に打れた。」と全般的讚美をしているのは、ここに記されるように「西国立志篇の美味を知り」「将来の大望を語り」、そして、苦勞の末に自己の活路を切り開いていった正作の中に「虚栄」という語に記されるアンビションの負の面を有していないということにその理由があるとみてよい。

「日の出」における児玉進五、大島伸一も、こうした意味では桂にきわめて近い位置にいる。この小説の枠組みは、そのほとんどがオックスフォード大、ハーバード大あるいは高等商業といった有名大学出身者で占められる某法学士の送別会の席上、私立小学校のみの教育しか受けていない児玉が、母校について語るといったものである。語り手である児玉の存在そのものがすでに学歴主義に対する批判となっているわけであるが、児玉が語る母校のありようがさらにそれを増幅するというしくみになっている。

さて、児玉の卒業した大島小学校の教育方針を示してみると「為す有る人と

れ」「人は碌々として死ぬべきではない、力の限りを尽して、英雄豪傑の士となるを本懐とせよ」というものである。ただし、ここで述べられている「英雄豪傑」は、いわゆる通常の概念におけるそれではない。もちろん「西国立志篇」などで示された偉人でもない。それは「人は人以上の者になることは出来ない、然し人は人の能力の全部を尽くすべき義務を持って居る。此義務を尽せば則ち英雄である」といったものである。したがって、この作品の理想的人物である大島小学校長の生活振りも次のようなものである。

先生の生活は決して英雄豪傑の風では有ません、けれども先生は眞の生活をして居るのです、先生は決して村学究らしい窮屈な生活、ケチ／＼した生活はして居ません、けれど先生は自分の虚栄心の犠牲になるやうな生活は為して居ません。

僕は先生と対座して四方山の物語をして居ながら、熟々思ひました、世に美はしき生活があるならば、先生の生活の如きは実にそれであると、先生の言論には英雄の意気の充て居ながら先生の生活は一見平凡極るものでした。

「眞の生活」といえば「掃去来」の中で追求されたものであった。そこでは「眞の自由こそ眞の幸福ではないか。眞の自由は我が如き心に多少の準備ある者が田園の生活を営む事に依て始めて得らるるのではないか、我に恒産がある。即ち衣食の自由がある。我には読書の嗜好がある、即ち心靈の慰藉がある。我には此の自然がある、即ち心と体との牧場がある」「眞の生活は此山林にあるのだ」としながらも、結局、「戦闘ノさうだ戦闘こそ人の運命だ。夫れ戦闘こそそれ自身が人の運命だ。行かう、明日立たう、明日ノ」と「虚栄の地」「都会」をめざして故郷を再出奔していく主人公が描出されていた。このことを思えば、ここには「虚栄心の犠牲になるやうな生活」を拒む「眞の生活」が描かれている。「平凡」でありながら「英雄の意気」に「充て居る」とされる実質がここにはある。

「日の出」の終末は、校歌制作の依頼を受けた卒業生児玉等が「東京にも歌人の大家先生は沢山あれど我等のやうに先生の薫陶を受け大島小学校の門に学び候ものならで、能く我等の精神感情を日の出の唱歌に歌ひ出し得るもの有るべきや、甚だ寛束なく存候」と断わり、校長は「浅ましい哉。教室に慣れ候に従つて心よりも形を教へたく相成る傾き有之、以後も御注意願上候」という返書を送るというエピソードで閉じられる。ここにあるのも「虚栄」につながる形式重視への深い反省である。すでに、北野昭彦氏が指摘されているように、こうしたエピソードを当時の教育界においてみても、その斬新さ、反権力的な姿勢は充分読み

とれる。

独歩は、社会的な視野からの問題提起を意識的にした作家ではなく、むしろ、反権力嗜好の稀薄な作家であるが、「非凡なる凡人」系列においては、権力構造の枠組みからはみ出していった人物を積極的に描出し、肯定的な評価を与えており、また、それゆえに社会批判となりえていることなどは特に留意すべきことである。

「河霧」の中には、直接「虚栄」について触れられている箇所はない。しかし、同時期に発表された「山林に自由存す」（明30・4）などではそれが重い意味を持って記されている。

山林に自由存す／われ此句を吟じて血のわくを覚ゆ／嗚呼山林に自由存す／いかなればわれ山林をみすてし／あくがれて虚栄の途にのぼりしより／十年の月日塵のうちに過ぎぬ／ふりさけ見れば自由の里は／すでに雲山千里の外にある心地す

ここには、自由の存する山林と虚栄（の都会）との対比が明確に詠みこまれていいる。しかし、それは単なる詩的対にとどまるものではない。そこには、立身出世をめざして家郷を見すてたことに対する痛切な痛みが内包されている。この痛みは、具体的には△忘れ得ぬ人々△を想起する際の大津の告白「僕は其時ほど心の平穏を感じることはない、其時ほど自由を感じることはない、其時ほど名利競争の俗念消えて総ての物に対する同情の念の深い時はない」において、より明確になる。このような俗世間的栄達に対する否定の念は、実は、「アゝ吾に虚栄、虚名の念、内に燃ゆ、何んぞ霊の眼を有つを得んや」（欺かざるの記）明26・3・16）といった例を引くまでもなく、他ならない独歩その人の自省と等しく重なる。

このように、「河霧」と同時期に書かれたものを視野に入れてこの作品をなめるならば、『大なる事業』てふ言葉の宮の壮麗しき台を金色の霧の裡に描て「大阪京都をも見ないで直ちに東京へ乗込むだ」豊吉に、「虚栄」に強くつき動かされ、それゆえに挫折していった人物の典型をみるのは、あなたが無理なことではない。

そうであるならば、正作型の人間と豊吉型の人間との本質的な差は、「虚栄」という語に象徴される立身出世における負の要素の有無にあるといつてよい。つまり、「非凡なる凡人」系列の作品の主人公たちは、とすれば「虚栄」の世界へ向かいがちな「大きな志」「大望」を、逆にそれとは遠い位置で達成した人々

であり、それゆえに「非凡」であり、「活た西国立志篇」たりえたのである。

四

次に、「虚栄」と深く関わる重要なものにアンビションの問題がある。

其後僕は毎日のやうに桂に遇つて互に将来の有望を語り合つた。冬期休暇が終り愈々僕は中学校の寄宿舎に帰るべく故郷を出立する前の晩、正作が訪ねて来た。そして言ふには今度会うのは東京だらう。三四年は帰郷しない積りだからと。僕も其積で正作に離別を告げた。

この引用からもわかるように、「非凡なる凡人」においては、アンビションは「有望」と訳出されているが、独歩は早くこれを「有望」と訳出している。

アンビション（野望）ある人間、又た人間のアンビション程、恐怖す可く、悪む可く而も其の外面の如何にも燦爛として能く社会の目を欺く物は非る也。（略）

凡そ此等アンビションなる者は多くは歴史、伝記の変説より生ず可きなり、古の英雄豪傑が為し得たる赫々の功名を読み聞てムラ／＼と胸中に起る煩悩なり

この文章は「アンビション（野望論）」と題して明治二十二年十二月「女学雑誌」に發表された独歩最初期のもので、全体の主旨は「外に条約改正の未だ其局を結ばざるあり、内には未だ立憲政体の実相実効を見ざるあり」という情勢下、「凛烈潔白の士」が輩出してゐる。しかし、『虚心平氣、之を分析すれば』彼等は『体面は如何にも真らしく見ゆれども其中に無数のアンビション』を宿してゐる。「正人、義士」現れ出でよ。」といったものである。ここでは、引用にみられるとおり、アンビションが「恐怖す可く悪む可き」「煩悩」としてはつきり否定的にとらえられている。こうしたいささか高揚したアンビション否定論は、次のような独歩自身の告白に正しく呼応する。

吾は宇宙的なり、吾は理想的なり、吾は宇宙的理想的に由て政界に立たんと欲す、吾の事業は革新に在るなり、我國政をして自由なる政治たらしめ我國民をして真理理想に由て立つの國民たらしめ、我國運をして世界人類進歩の魁たらしめんとするに在り、吾が政治界に立つ之れに由るなり、決して政治的、即ち野心的、名利的、肉欲的ならざる也。（『欺かざるの記』明26・2・

19）

この一文は、金森通倫の自由新聞に入社する際に記されたもので、はじめて現実の政治界に参入した独歩の内側がよく知られるものである。しかし、こうした言辭が独歩の生のものであつたかといふと必ずしもそうではなく、むしろ、その逆で、内部に存する強い「野心」「功名の念」を自覚せずにはいられなかつたというのが実情である。たとへば、右の日記の記述から一箇月もたぬうちに、独歩は「吾切に感じ釈然心悟したり。吾実に功名に急なり」（明26・3・8）「白状す、自白す、虚栄の妄想、僥倖の浮念は少壮者の常なる如く、吾にも亦た往々加此、之れ悉く社会生活の魔力なり、吾が思想は社会生活の為に動き、吾が感情は社会生活の為に湧く、之れを以て虚栄僥倖の妄想浮念より脱する能はず、良い哉」（同・3・21）と記さざるを得なかつたのである。こういう独歩の内面の揺れを客観的にとらへ直した上で、「アンビション（野望論）」を虚心に読めば、この論調の激しさは、独歩の内部に存する「虚栄、功名の念」を封じ込めるために書かれたものであるともとれる。

独歩は、晩年、自己の半生を顧みて

全体自分は、功名心が猛烈な少年で在りまして、少年の時は賢相名將とも成り、名を千歳に残すといふのが一心で、ナポレオン、豊太閤の如き大人物が自分より以前の世にあつて、後世を圧倒し我々を眼下に見て居るのが、残念でたまらぬので半夜密かに、如何にして我れは世界第一の大人と成るべきやと言ふ問題に就つてぼろ／＼涙をこぼした事さへ有るのです。（中略）
処が、自分の精神上に一大革命が起こりました、即ち、人性の問題に就つたので有ります。（中略）今迄の有望が、がらり破れて仕舞たのです、ナポレオンも、秀吉もいつか、豪く無くなつて、了つたので有ります、若豪ならば其豪いと言ふ意義がまるで違つて来て比較根性から出た意義、功名、利達、の意義に成つて仕舞たので有ります。（『我は如何にして小説家となりしか』明41・1）

と語っているが、この一文は、独歩の内部を強く支配し続けたものが何であつたか、また、「アンビション（野望論）」がなぜ書かれざるを得なかつたかをよく示している。

ところで、「我は如何にして小説家となりしか」は、かなり明瞭に独歩の精神の変容のプロセスを示している。しかし、こうした変容は、あながち独歩固有のものといふよりも明治を生きた青年に通用のものであるといへなくもない。四民平等の宣告、地所永代売買の禁令解除などによる居住の自由、職業選択の自由の

保証といった維新の動向は、封建的桎梏に長い間縛られていた人々を一気に解放し、大衆の立身出世に対する欲求を激しく噴出させるに至ったのは、多くの史家の記すところである。文学史的に特筆すべき事象としては、先に触れた「西国立志篇」「学問のすゝめ」二著が、国民大衆の圧倒的支持を受けて読まれたということがある。当時の青年たちは、これらの著に触発される形で立身出世の倫理を自らに課し、かつ実践していくことになる。そのエネルギーの強大さは、「学問のすゝめ」が、福沢の意図は別にして、初篇二十二万冊の売れゆきをみせ、さらに第十七篇まで書きつがれたという事実、あるいは、「西国立志篇」と同一パターンの各種立志篇、たとえば「東洋立志篇」(明14・6)「女子立志篇」(明16・4)あるいは「日本立志篇」(明27・2)などが陸続として出版され、多くの読者を獲得していったという事情などによっても容易に推察できる。

しかし、「内閣制度」の樹立、「帝国大学令」の発布などに代表される明治十年代末の一連の近代制度の確立は、次第に立身出世の幅をせばめ、それゆえにまた、国家政策に緊密に重なる形で存在していた個人の活気に充ちた上昇意欲は次第に薄れ、明治初期のいわば立身出世主義の至福期は急速に終息していくことになる。

明治という時代におけるこうした立身出世主義の推移のさまを考慮に入れるならば、独歩の述べた「英雄豪傑」の概念の変容は、そのまま明治立身出世主義の変容の過程に重られる。ただし、ここで留意すべきは、立身、出世、功名、至福、成功などのエネルギーの淵源ともいうべきアンビション観は、右に述べた時代の変容のプロセスと、独歩の場合逆コースを辿っているという点である。つまり、はじめアンビションは「野望」といった否定的なニュアンスを持つ言葉で訳出され、後、逆に「大望」と訳出される。とすれば、少なくとも、アンビション観の変容は時代の状況から浮上した独歩固有の問題といえそうである。

五

独歩の文学への関心と実社会への参入との間には、深い相関関係がある。ここで独歩の社会参入のあらましを年譜的に辿ると次のようになる。

明治二十四年吉田松陰の松下村塾にならい山口県田布施に波野英学塾を開く。
二十六年自由新聞社入社。同年大分県佐伯の鶴谷学館に教頭として赴任。二十七年印刷業を企画。二十八年北海道移住を計画。三十二年報知新聞社入社。三十三

年星亨の民声新報社に入社。三十四年政界出馬の運動開始。三十五年敬業社入社。三十九年独歩社を起す。

独歩は、生涯一度もいわゆる職業作家の位置にいなかったわけで、右に記したように様々な事業を計画し、あるいは職業につく。しかし、それらはことごとく失敗し挫折していく。作品は、その合い間を縫うようになっているいはそれらと競合するような形で発表されていく。したがって、独歩の一生は実社会と文学との間を激しく揺れ動いたものとしてとらえることも可能である。独歩の作品の多くが、現実生活の失敗、挫折の痛みをバネとして産出されたものとしてうつるのも、実はこうしたことがらによる。

このあたりの事情を「非凡なる凡人」系列の作品執筆期に限定してみてみよう。最初に触れたように、「非凡なる凡人」の主人公桂正作のモデルである桂紀への接近は、明治三十五年十月であったが、この時期は政界進出を企てながらも星亨の暗殺によりそれを断念した翌年にあたる。この間の動向は、独歩自身書き残したものが少なく、詳細に把握することは難かしい。しかし、わが国初の政党内閣である憲政党内閣の成立した翌明治三十二年報知新聞に入り政治外交欄を担当、翌年には伊藤内閣の通信大臣であった星亨の民声新報社に入社し、やがて星と結んで代議士に立候補しようとして運動を展開するといった事実のみからでも、政界に強くつき動かされ、急速に俗世間的課題を自らに課していったさまは容易に推察出来る。また、この期が、自由党の機関誌を発刊する自由新聞者への入社とともに、独歩が政界とより結んだ唯一のときであったことを思えば、独歩の内面は、先に引いた「アンビション(野望論)」あるいは自由新聞社入社時に記された日記にみられる心の高揚とさほど異なるものではなかったであろう。この企てが、いわば糊口のための自由新聞社入りとは異なり、自ら政界に乗り出さんとしたものであるだけに、あるいは、いっそう増幅されたものであったかも知れない。だが、この政界進出計画は星亨の暗殺により断念される。

こうした挫折期、独歩は桂紀を知ることになる。時期が時期であるだけに、独歩にとって桂は「西国立志篇」につき動かされながらも、それがさし示すタイプとは全く別タイプの立志としてうつつたに違いない。そこではしばしば「勉強・勉強・時間の尊重」などの徳目が説かれているが、これらの徳目に導かれながらも、人々の頂点に立つ人間とは異なる、しかも、これらの徳目をみごとに生かした人物が桂である。

桂紀への深い関心はこの一点にあるといつてよい。「非凡なる凡人」系列の作

品がいずれも重い比重をもって「虚榮」に触れているのは、「燃ゆるばかりの志」を内にいだきながらも、それを「虚榮」とはほど遠い地点で達成することの出来た人間に対する独歩その人の自省の念が強く反映しているためである。そして、重要なのは、この作品を完成することによって独歩は内部に重々しく存在していた負の要素を持つアンビション、つまり「野心、功名」から解き放たれていったということである。そうでなければ、「非凡なる凡人」系列の作品が持つ明るさ、健康さの説明はつかない。

「我は如何にして小説家となりしか」においては、独歩の精神史が図式的に整理して示されていた。しかし、ことはそれほど単純であったとは思えない。むしろ、独歩の内部はたえず動揺していたと考えた方が真相に近い。「精神上の大革命」つまり独歩の人間観の転換期をどのあたりに置くかの検討は、小村英一、北野昭彦氏などが精力的になされており、各々示唆に富んだ指摘をされている。それらの論から、「精神上の大革命」の時期をひとまず明治二十五年あたりにおくとして、それによってもたらされた人間観が、独歩の内部でさほどの揺れもなく、確固たる像を結ぶのは、この「非凡なる凡人」系列の作品完成期であると考えられる。このことは、「我は如何にして小説家となりしか」で述べられている「英雄豪傑」の概念と「非凡なる凡人」系列の作品で触れられているそれとの近似が端的に物語っている。

独歩文学にしばしば登場する語り手の位置などによっても、このことははっきりと裏付けられる。

「忘れえぬ人々」の語り手大津はどのような位置、役割りを担っていたであろうか。そこでの大津は「自己将来の大望に圧せられている」知識人であり、語られる主、対象である「忘れ得ぬ人々」は「名利競争」「立身出世」とはおおよそ無縁の「小民」であった。その大津が「忘れ得ぬ人々」を想起するのは、「生の孤立を感じ」「自我の角がぼきり折れ」という条件の下であり、「名利競争の俗念が消え」去り、「自由を感じ」じるのもその時である。しかし、それはあくまでも観念の上でのことであり、大津は決して「忘れ得ぬ人々」と同じ地平におり立つことはない。この作品は、それゆえ逆に、大津の内部にある詠嘆、痛みが重々しいリアリティを持っているという面がある。このことを最もよく示しているのは、「忘れ得ぬ人々」の最後に書き加えられるのが、大津と同じ位置にいる画家志望の青年秋山ではなく、二人が宿泊した宿の主人であることである。秋山が「忘れ得ぬ人々」の資格を有していないということは、他ならぬ大津その人もそ

の資格を有していないことを如実に示している。このように「忘れ得ぬ人々」における語り手と語られる対象たる「忘れ得ぬ人々」の距離はことの大きく、一篇の小説的緊張は、大津と「忘れ得ぬ人々」の距離によって成立しているともいえる。

これに対して、「非凡なる凡人」系列の語り手は、大津とはいささか様相を異にしている。「非凡なる凡人」の語り手である「僕」は、正作とは異なり公立中学に入学するという、いわばエリートコースを歩む人として設定されているが、「僕」は正作と同じ位置に身を置こうとし、実際そうする。次にあげる逸話は、単なる残簿で俗っぽい友情物語のそれではない。

桂は美味さうに食ひ初めたが、僕は何となく汚らしい気がして食ふ気にならなかつたのを無理に食ひ初めて居ると、思はず涙が逆上げて来た。桂正作は武士の子、今や彼が一家は非運の底にあれど、要するに彼は紳士の子、それが下等社会と一所に一膳めしに舌打ち鳴らすか、と思つて涙含んだのではない。決してさうではない。いや／＼乍ら箸を取つて二三口食ふや、卒然、僕は思つた、あゝ此飯は此有為なる、勤勉なる、独立自活して自ら教育しつゝある少年が、労働して儲け得た金で、心ばかりの馳走をして呉れる好意だ、それを何ぞや不味さうに食ふとは、桂は此如く三度の食事をするではないか、これを嫌々ながら食ふ自分は彼の竹馬の友と言はれうかと、さう思ふと僕は思はず涙を呑だのである。そして僕は急に胸がすが／＼して、桂と共に美味しく食事をして、縄暖簾を出た。

また、「日の出」の語り手児玉進五は、話題の主である人物と同列にあり、たとえ、語り手と作中人物との組み変えがなされたとしても作品は成立する。ここでは、語り手と話題の主である人物との緊張したかわりではなく、むしろ同じ地平に位置している。「忘れえぬ人々」系列の作品も、話題の中心である人物は厳密にそうであるとはいえないにしても、基本的にはいわゆる立身出世とは無縁の存在である。変貌しているのは語り手の側の内面の意識である。独歩は小説的虚構を軸にした作家ではなく、自己の思念、実感を語り手、あるいは登場人物に託して直截に読者に語りかけるといった作家である。それゆえ、こうした語り手の変質は、独歩の精神史の変容の過程そのものともいえる。

「立身すればこそ学問だ」と痛烈に文三を批判する「浮雲」（明20・6）のお政「唯々功名に熱し学問に熱していた」「田舎教師」（明42・10）の青年たちも基本的には「忘れえぬ人々」における秋山、大津と類縁の人である。ただ、

大津の胸中には「名利競争の俗念」につき動かされる自己に対する苦悶があり、この点で「忘れえぬ人々」は新しい。しかし、「非凡なる凡人」と同時期に発表された「女難」（明36・12）の主人公の母は「何卒か早く立身して呉れ、草葉の蔭から祈つて居る」といって死んでいくが、「如何して立身するか、それは全然」「見当がつかず」、主人公に至っては「自分の立身のことには如何いふものか、余り気をかけ」なかつたと告白する。ここには、もはや「忘れえぬ人々」における大津の苦悶はない。つまり、俗世間的功名への渴望はすでにない。こうした点では「女難」も「非凡なる凡人」の世界に近い。ただし、「女難」の主人公が負の人生を迎ったのに対して「非凡なる凡人」系列の主人公たちにはいささかの賢りもない。こうした差異は、くり返すが、独歩の精神史をそのまま反映したものとしてみる事が出来る。つまり、「忘れえぬ人々」から「非凡なる凡人」系列の作品への過程は、独歩の内部で、アンビョンの持つ負の面を正のそれへと、独歩の語彙でいえば「野望」を「大望」に転化していくプロセスであったといえる。

こういふふうに見てみると、「非凡なる凡人」系列の作品は、独歩の「精神上の大革命」のゆきつくところ、帰結があるとともに、独歩が青年期からとらわれ続けた「野望、功名欲」から解放された記念碑的作品である。比喩的にいえば、独歩がかくありたいと言ふ夢、健康な歌が歌いあげられているといつてよい。そうであるならば、結局のところ、「非凡なる凡人」系列の作品の異質性は、確かにそう指摘出来るとしても、それらは独歩文学の突出としてとらえられるべきではなく、独歩の精神史の全体的動向に深くかわる必然によって出現したものである。

〔注〕

- (1) 平野謙「作品解説」（講談社版「国木田独歩集」 昭37・3）
- (2) 森銃三「独歩の小説とそのモデル」（『国文学解釈と観賞』昭25・7）所収の聞き書。
- (3) 「青年時代の国木田独歩」（昭45・7）
- (4) こうした問題を視野に入れた論文に、坂本政親氏の「独歩文学の倫理性―『独歩集』『運命』を中心に―」（『東洋研究』昭48・2）がある。
- (5) 独歩文学における婦郷者に焦点をあてたものには、滝藤満義氏「様々な婦郷―『帰去来』『河霧』『酒中日記』」（『名古屋大学国語国文学』昭55・12、56・7、57・2）をはじめ秀れた論文が多いが、ここでは触れる

余裕がなかった。

- (6) 「日の出」は「教育界」、「非凡なる凡人」は「中学世界」、「馬上の友」は「青年界」に各々発表された。
 - (7) 『国木田独歩の文学』（昭49・9）第八章「『少年もの』と『教師もの』の人間観的基盤」
 - (8) 「国木田独歩の『小民史』」（『国語国文』昭50・12）
 - (9) 「作家独歩の誕生について（一）―精神革命の問題を中心に―」（『立命館文学』昭54・3）
- 〔付記〕 1 独歩の文章の引用は、全て学習研究社版、国木田独歩全集によった。なお、引用に当たって、旧字体の漢字は新字体に直し、四角傍線の類はすべて省略した。
- 2、小考の一部は、昭和五十六年度広島大学国語国文学会春季研究集会において発表したものである。